

ハンセン病と今

第二中学校 一年 今村 文音

私は、学校の授業で学ぶまで、このハンセン病のことを知りませんでした。手足が変形するおそろしい病氣。痛みを感じなくなるこわい病氣。そして…。何十年もの間、家族や友人から差別され、本名を名乗れず、故郷にも帰ることができずにたくさんの人々が苦しんだ病氣。それが、「ハンセン病」でした。

こんなにおそろしい出来事が、私が今いるこの日本で、長野県で、起きていたということに、私はとてもおどろきました。病氣そのものもこわいけれど、周りの人間もまた、十分にこわいのです。感染した本人だって大変なはずだし、かかりたくてかかったわけでもないのに、友達から差別をうけ、一番支えなければいけない家族にさえこわがられる…。誰だってよく分からない病氣をおそれるのは当たり前。でも、だからといって、その人の人生を全てうばうのが許されることはありません。しかもそんなことが、ハンセン病はうつりにくく、治療薬があれば完治する病氣だと分かってからも続いていたなんて、本当にあつてはならないのです。

感染が判明したら、すぐに周りを消毒し、感染者は強制的に療養所に入れられ、そこで一生を過ごす。元ハンセン病患者である伊波さんは、高校へ行くために命がけて療養所を脱出し、見事成功しましたが、誰でも簡単にそれができるわけでは無いでしょう。当時は脱出ができれば重い処罰を受けるよう

でしたから、当時その状況に置かれていた人達は、地ごくのよう日々だったと思います。

どうしてこんな差別が起こってしまったのか。それはやはり、未知の病気に対しての人々の不安が原因だと私は考えます。今だってそうです。いつどこで感染するのか、感染したらどうなるのか、薬はあるのか……。まだまだ分からないコロナウイルスに、私達はいつも振り回されています。そして、それに不安を抱くのも、不思議ではないでしょう。そんな中で、本当かどうかは分からなくても、それに関しての情報が入ってくれば、日々の不安やストレス、そして同じような人々を救えるかもしれないという誤った正義感によって、差別が生み出されていくのです。

でも、過去のあやまちをくり返してはいけません。ハンセン病の時と同じように、差別が起きるのは、当時の人々の本望ではないはずです。何より、私達自身、そんなことをまた起こしたくはありません。そんな今だからこそ、ハンセン病のことを周りの人に伝えなくてはならないのです。こうして学校で学ばなければ私もハンセン病について全く知りませんでした。ならば、同じような人もきっとたくさんいると思います。だから、たくさんの人に伝えることで、未知の病気のおそろしさを知ってもらい、コロナウイルスによる差別を少しでも無くすことができるかもしれないのです。

私一人でできることはあまりないかもしれませんが、でも、誰かに話して伝える事なら、きっと誰でもできると思うのです。だから、これを読んだ人にも、一

人でもいいので、誰かに話してもらえればいいなと思います。そうしてハンセン病を後世に伝えていくことが、差別を減らすことにつながっていくのです。

もう二度と、同じことが起きないように、これからも過ごしていきたいです。